

## 定型表現からのスキーマ抽出と創造的言語使用 —「A に B」が示唆する通時的な拡張の可能性—

定型表現は、複数の語が慣習的にひとつのまとまりをなしている表現とされ、その範囲は慣用句から決まり文句まで多岐にわたる。しかし、定型表現といえども必ずしも同じ形式で発話されるものではなく、あらゆる要因によって柔軟に言い換えが行われる。この言い換えなどによる定型表現の拡張現象をとらえることで、人の創造的な言語使用とその認知的基盤の一端を明らかにすることが、本研究の大きな目的である。本発表では、主に「A に B」形式をとる定型表現を量的・質的な側面から分析することで、定型表現の形式と意味に関する特徴を指摘し、更にその分析の結果を通時的な観点から考察する。

本発表は、大きく4つに分かれる。まず日本語の定型表現に関する先行研究を概観し、形式的な観察を十分に行う必要性を主張する。次に、日本語の定型表現の大まかな実態を辞書記述に基づいて網羅的に観察し、定型表現にそれぞれ特徴的な形式が存在することを指摘する。次に、その中から名詞句「A に B」に焦点を絞り、その意味的な特徴を分析する。最後に、その分析結果から定型表現の構文的なネットワークの存在を指摘し、定型表現の通時的な拡張の可能性を述べる。

日本語の定型表現の中でも、慣用表現の研究は中心的な位置を占めていると言える。国語学、日本語学においても宮地(1982)や國広(1985)、石田(1998)などの研究があり、また認知言語学においても、榎山(1997)や有蘭(2007)による研究がある。これらの研究は主に慣用表現の意味的な分析および分類が中心となっているが、それと形式的な特徴との関連性についての研究は、未だ発展途上の段階にある。その理由のひとつとして、定型表現にはその定義上、あらゆる形式が存在し、形式的な統制を含んだ上での分析が難しいことが挙げられる。したがって、まず形式的な特徴を詳細に観察し、共通した形式をとる表現を抽出できるようにすることが、定型表現分析にあたって重要な条件である。

本研究では、「慣用句」と「ことわざ」を分析の対象とした。用例の収集には、佐藤(2007)による「基本慣用句五種対照表」(以下「対照表」)を使用した。まず対照表で「慣用句」「ことわざ」とタグ付けされている定型表現を全て抽出し、形態素解析を行った後、用例の末尾の品詞と、一用例あたりの語数を集計した。その結果、「慣用句」と「ことわざ」で形式的な棲み分けがなされていることを確認した。たとえば、「慣用句」は動詞句「A を V」の形式をとるものが極めて多かったのに対し、「ことわざ」にはそのような形式は少なく、かわりに「A は B の C」(早起きは三文の得、嘘つきは泥棒の始まり、必要は発明の母、等)から「A から B」(棚からぼた餅、ひょうたんから駒、藪から棒、等)まで、一定の形式的な共通点をもった名詞句構造が多かった。この結果は、「慣用句」や「ことわざ」が無数の構文的なネットワークの集合から形成されていることを示唆している。またこれは、山梨(2009: 253-254)で指摘された定型表現の構文的特徴とも一致している。

次にこの中でも、「A に B」の形式に焦点を絞り、意味的な分析を行った。「A に B」の形式をとる定型表現は全体で28例あったが、それらの多くが「ことわざ」に属する表現だったことに加え、およそ半数が〈A に B を与えることが無意味である〉という意味であった(釈迦に説法、豆腐にかすがい、豚に真珠、柳に風、等)。また一方で〈A に B が加わることで状態が更に強化する〉という意味のもの

があった（鬼に金棒、泣き面に蜂、両手に花、等）。しかし、全ての「AにB」形式がこの二種の意味のいずれかであるとは限らず、「掃き溜めに鶴」「立て板に水」など、用例特有の意味を持つものも見られた。

以上の結果をまとめると、定型表現の成立、拡張表現およびその定着に関して、無数の構文的なネットワークの集合が深く関係している可能性が考えられる。多くの定型表現は、成立してから現在に至るまで、創造的な言語使用の基盤として用いられている。そのような言語使用を経ることによって、定型表現に関する構文的なスキーマが抽出され、また新たな拡張表現を動機づける。ほとんどの拡張表現の発話頻度は低いことが予測できるが、もしこの拡張表現が一定の頻度をともなうて継続的に発話された場合、同様の意味を持つ新たな定型表現として定着しうる。今回の分析は、〈AにBを与えることが無意味である〉という意味を持つ「AにB」形式の定型表現のいずれかが、創造的な言語使用を経ることで類似した意味の定型表現の成立および定着を動機づけていることを強く示唆している。今後通時的な観点を通してこの定型表現の定着の現象をさらに探っていく必要があるといえよう。

(1957字)

#### 【参考文献】

- 有蘭智美 2007. 「身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の統語的凍結性」 『言葉と文化』 第8号. 139-156.
- Fraser, Bruce. 1970. *Idioms within a Transformational Grammar*. *Foundations of Language* 6: 22-42.
- 深田 智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』 東京: 研究社.
- 石田ブリシラ. 1998. 「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」 『筑波応用言語学研究』 5: 43-56.
- 國広哲弥. 1985. 「慣用句論」 『日本語学』 4(1): 4-14.
- 宮地裕. 1982. 『慣用句の意味と用法』 東京: 明治書院.
- 宮地裕. 1985. 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」 『日本語学』 4(1): 62-75.
- 糴山洋介. 1997. 「慣用句の体系的分類」 『名古屋大学国語国文』 80: 29-43.
- 佐藤理史. 2007. 『基本慣用句五種対照表』 (<http://kotoba.nuee.nagoya-u.ac.jp/jc2/download/kanyo/v20070528.pdf>)
- Wray, Alison. 2002. *Formulaic Language and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論—構文のゲシュタルト性』 東京: 大修館書店.